

1-3章で神の救いの恵みのすばらしさを伝えたパウロは、4章から始まった神に召された者の生き方、特に25節以降のあるべき人間関係のまとめとしてパウロは、「互いに赦し合いなさい。」と勧めます。

「無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしり」その一切を「悪意とともに、みな」捨て去れ！とパウロは言います。「無慈悲」とは、「執念深さ」。第一コリントでパウロは愛を「13:5 人のした悪を思わず」と定義しました。「思う」は、「記録する、カウントする」の意味です。人がした悪いことを記録する、数え上げる執念深さです。

怒りは、一時に爆発する感情。憤りは、ずっと根に持つ怒りです。叫びは、声に出して相手に投げかけた怒り。憤りは、相手のおないところでののしり、悪口を言うことです。悪意は、相手への悪感情。不信感、不満、殺意(いなければいい、という思い)…。そのすべてを捨て去りなさい、とパウロは言います。

パウロは、決して実現不可能なことを人に要求する人ではありません。彼自身、濡れ衣の結果、ローマの獄中にあります。明日をも知らない身となれば、不安とともにあまり健康的なことは考えないのが普通です。「4:31 無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい」と命じたパウロは、確かに捨て去ったのです。「4:32 お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」。親切は、あわれみ深い、慈悲深い、と訳され、普通は神様が人をあわれまれる、という時に使うことばです。(ルカ6:3、ローマ2:4)。この親切にするという愛は、キリストを知る以前の古い人にはない性質なのです。

「赦す」とは「恵みを与える」、の意味です。それは「神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださった」めぐみです。「神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように…」。愛にはモデルが必要です。私たちは、キリストというこの上ない愛のモデルによって、この私自身が愛され、赦されている恵みを体験しています。

パウロが獄中で心に迫ってきたのは、人にされたあのことではなかった。自分が赦されている。ありのまま100%神様に受け入れられている。パウロは罪すべてが赦されている事実を、喜んだのです。感謝したのです。その罪赦されたものとしての、感謝と喜びが、彼を不健康な「無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしり」から守ってくれました。

赦しの中を生きていく、その約束の世界を生かされていることに感謝しながら歩んで行きましょう。